インクルーシブセンス
手合わせ表現における力性を手がかりに

Inclusive sense
Using the power in the expression from hand-contact improvisation as a clue

○三輪敬之(早稲田大学)，高橋卓人(早稲田大学)，林龍太郎(早稲田大学)，西洋子(東洋英和女学院大学)

Yoshiyuki MIWA, Waseda University
Takuto TAKAHASHI, Waseda University
Ryutaro HAYASHI, Waseda University
Hiroko NISHI, Toyo Eiwa University

Abstract: Co-creative activities can only be achieved when equal reciprocity is emerged between heterogeneous, diverse people. For that purpose, it is necessary to have a realization of the field (*ba*) that encompasses the differences as they are. It is a kind of feeling that bridges between things and matters or explicitness and implicitness implicit which can be inspired by cultivating the field (*ba*). From such standpoint, the study looks at the function of inclusive sense which supports co-creation, using the experimental study that focuses on power in the expressions from hand-contact improvisation as a clue.
Key Words: Co-creative expression, Inclusive sense, Hand contact improvisation, *Ba*

1. 場を耕す手合わせ表現

場を耕すことやインクルーシブセンスについて著者が考える起点となったのが，西洋子によって長年にわたり実践されてきた “手合わせ表現”である．手合わせ表現は，手のひらと手のひらを直接触れ合わせながら，即興的に表現を創りあっていくことを基本にしている．そして，この手合わせ表現によって二人の関係が深化していくことが，西と三輪により見出されている(1)．それは大きく分けると5 段階からなる（図１）．すなわち，参加者の身体表現は，自己の鏡をふくような自己中心的なモード１から，自己の領域に相手を招きいれ，相手側の空間を探索するようなモード２へと変化する．次に，自他の領域を含む広い空間内を自在に動き始めて，共同で描画作業をしているかのようなモード３へと移行していく．モード３は Collaboration 的な活動に相当するとみなされる．この段階では，いまだ自他の境界が存在するが，モード４に移行すると，双方が描く表現世界のなかに自ずと入り込み，“わたしたち”の表現そのものに包まれるようになる．ここに至って，表現の共創(Co-creation)が起こる．さらに，モード５では “わたしたち”を包む表現世界それ自体が外に開かれることによって，表現の多様化と持続が可能になる．ここで注意すべきは，手合わせ表現は図に示されるようなモード１から５への移行を目標にして始められるのではないということである．そうではなく，いずれもが自分自身となって表現し，可能性を見出していくなかで，副産物のように，違いを違いのまま包み込むような感覚（インクルーシブセンス）が生まれ，高次のモードが参加者のあいだに自ずと出現してくるのである．要するに，表現のなかで生成する場が耕されるにつれて,共創することが意識されることなく促され，深化していくのである．このことは，共創表現ワークショップのファシリテーション技術のあり方やファシリテータの存在意義を考える際にも押さえておくべき点であろうと，著者には思われる．

一方，著者らは手合わせ表現を手がかりにして，共創表現の創出ダイナミクスについてこれまで研究してきた(2)．具体的には，図２に示すような，前後方向の動きから表現をつくりあう手合わせ表現計測システムを用いて，共創表現における手のひらの動きと身体全体の動きの関係性に着目した計測を行ってきた．しかしながら，共創を支えるインクルーシブセンスがどのような表現的関係性において関わってくるのかは明らかにされていない．そこで本研究ではその手掛かりを得るため，他者との力のやりとり，すなわち力性に注目した計測を行うことにした．さらにその結果を踏まえ，先に開発した一人手合わせ表現システム(3)とインクルーシブセンスの関わりについても検討した．

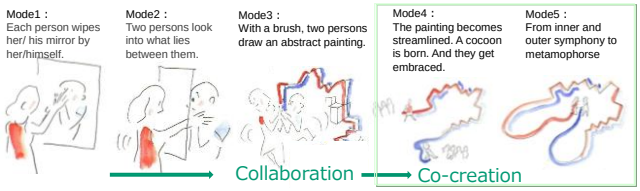

Fig.1 Deepening stage of relation through hand contact improvisation.

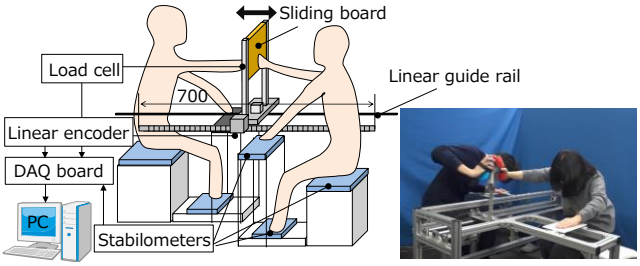

Fig.2 Measurement system of hand contact mprovisation.

2. 手合わせ表現における力性

手合わせ表現計測システムを用いて，これまでに以下のような知見が得られている(2)．すなわち，共創表現においては，意識に上らないそれぞれの身体全体の動き（床反力中心の変化）が，双方で創りあう手のひらの動きに時間的に先行すること，さらには，双方で創りあう表現の位置変化（スライド板の動き）のリターンマップをとると，カオスアトラクタ的な構造（場のアトラクターと呼称）が存在することなどである．なお，ここでは，図１のモード４や５におけるのと同様のコメントが表現者から得られた試行を共創表現が遂行されたとしている．

そこで本研究では，スライド板にかかる力の変化を計測することにより．互いのあいだで交わされる力のやりとり

を調べることにした.結果の一例を図３に示す.これより，共創が起きていない時には，スライド板を押す時とそれを受ける時でそれぞれが交互に役割分担しているかのように力を出し合うため．力の差の時間変化は正弦波のような単調な変化を繰り返す．それに対して，共創が起きている時では，急激に変化する不安定な相と変化があまり認められない安定な相との質の異なる二つの相が存在することが見出された．その場合，力の差の時間微分である躍度に着目してみると，ラミナー相とバースト相が交互に現れる間欠性カオスと形式的に似た構造を有することが分かった．なお，ここでの躍度は双方で創りあう表現に関わっていることから，今後は表現躍度を呼ぶことにする．さらに，ラミナー相では，力の大きさが多様に変化しても，双方のあいだの力の位相ズレが小さいのに対して，バースト相ではズレが大きくなることが見いだされた(図４)．また，身体表現ファシリテータに様々な力のやりとりを再現してもらったところ，双方が力をこめて創りあう“受けつつ引く”動作において，ラミナー相が現れることが確認された．加えて，表現者から，ラミナー相では受動と能動が曖昧になることや,相手の思いを受けとめるといったコメントを得た．それに対して,バースト相は素早く速い動作において現れ，表現者から，表現を互いに引き出しあっているといったコメントを得た．このことをバースト相における位相のズレは反映していると考えられる．そして結果的に，図５にあるように，バースト相では力の差や表現躍度を双方で幅広く多様に創りだし，ラミナー相では，それらを一定の範囲に収束させていると推察される．

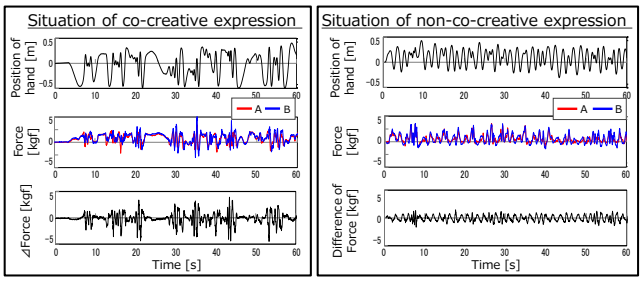

Fig.3 Comparison of co-creative hand contact inrovisation and non-co-creatice hand one.

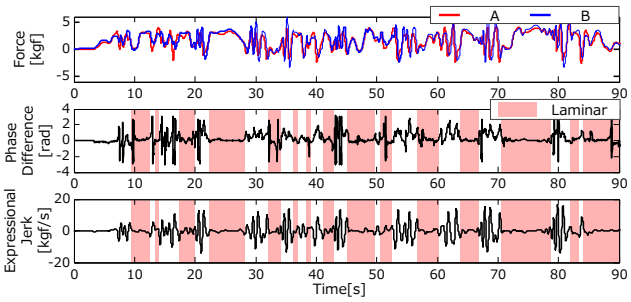

Fig.4 Relationship between phase difference and expressional jerk with force changes.

以上の結果は，共創表現における力のやりとりには，互いの心の状態やその変化が反映されることによって，二つの質の異なる相が出現する可能性を示すものといえよう．これは，互いの場が共鳴したり，場がズレあったりしながらして場が耕され，共創表現が進行することを暗示しているようにも思われる．さらに，本システムによる手合わせ表現では，手のひらに加わる力(圧力)と手のひらや身体全体の動き(加速度)を表現者は感じながら表現を創りあっていると考えられる．そうした場合，ラミナー相では前者の圧力感覚を双方で共有させながら動きを創っているのに対して，バースト相では動きのなかで細かく圧力感覚を変化させ，“わたしたち”の表現の深化を促している可能性が考えられる．このことは，モノとコトのあいだの様相を力のやりとりから取りだせる可能性があることを期待させるものである．加えて，躍度は感性に関係があるとされていることから，表現躍度はインクルーシブセンスの触発を調べていく手がかりを与える可能性が考えらえる．

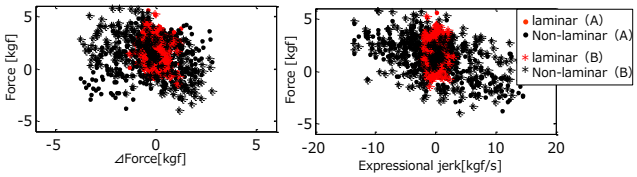

Fig.5 Relationship between laminar phase and burst phase in changes of force.

3. インクルーシブセンスと力性（試論）

上述した手合わせ表現において，共創にならない表現から共創する表現へと移行するためには何が必要になるか．その一つとして，多様な人々における表現の違いを違いのままに包摂し，対等の相互性を生み出すインクルーシブセンスの創出をあげることができよう．上述の結果に示された，ラミナー相における受動でも能動でもないような曖昧な感覚は，“わたし”と“あなた”の“あいだ”が開かれ，“わたしたち”となって表現を創りあっている最中の感覚と推察される．それは，互いに創りあう表現に“わたし”も“あなた”も巻き込まれ，表現のなかで生成，変化する“場”が“わたしたち”そのものであるような感覚なのではないだろうか．また，それは，自己同一的な項を基本として項と項の関係で事態を表現するのではなく，過程のなかで全体が変化する事態を表現する中動態における感覚に近いことが考えらえる(4).

仮にそうであるならば，それは，わたしとわたしのなかの他者（もう一人のわたし）が出会う感覚とも密接に関係しているはずである．そこで著者らは，意識に上る手のひらの動きを明在的な“私”，意識に上らない身体全体の動きを暗在的な“もう一人のわたし”と見立て，“私”と“わたし”の間で手合わせ表現する，一人手合わせ表現システムを先に開発した．これは，双方で創りあう表現（スライド板の動き）そのもののなかに表現者自身(私)が巻き込まれるような主客非分離なシステム設計がなされている(3).そして，このような装置を継続的に使用すると，表現躍度に変化が現れ，ラミナー相とバースト相が交互に出現してくる結果がこれまでにいくつか得られている.このことが，もう一人のわたし（他者性）の侵入によって，場が耕され，“わたしたち”という場の感覚，すなわちインクルーシブセンスを触発することにつながっているのかどうかについては，今後のさらなる研究を待たねばならないであろう．

参考文献

(1) 西，三輪，被災地での共創表現と共振の深化ーこのフィールドは何を問いかけているのかー，アートミーツケア, Vol.7, pp1-18, 2016.
(2) 三輪，共創表現とコミュニカビリティ支援，計測と制御，　51巻11号, pp.1016-1022, 2012.
(3) 三輪，西，郡司，板井;表現耕法による共創のシステムデザイン, SI2014講演演論文集, pp872-874, 2014.
(4) 森田，芸術の中動態，萌書房, 2013